

大都市高齢社会の生活スタイル

—東京都心部高齢者実態調査概況報告—

はじめに

1. 東京都心部（23区）の高齢者—基本的属性—
2. 家族・親族
3. 就業状態
4. 余暇活動
5. 集団参加
6. 高齢者の社会関係
7. 高齢者の生活と意識
8. 余暇活動の属性分析
9. 社会活動の相互関係

まとめ

高橋 勇悦*

要 約

本稿は「大都市高齢社会の新しい生活スタイルに関する調査」結果の概況をとりまとめたものである。今日の高齢社会において高齢者が新しいライフスタイルを身につけることはきわめて重要な意義をもっており、その意味から、高齢者自身による新しいライフスタイルの創出にむけて、高齢者のライフスタイルの実態を的確に把握しておく必要がある。われわれの調査によれば、東京都心部の高齢者は、余暇活動や集団参加において、日常的な趣味、あるいは非日常的な神社・仏閣のお参り、繁華街での買い物、国内旅行などの活動を中心に、その他の場合は必ずしも参加率が高いわけではないが、多様な活動や参加を行なっている。ボランティア・アソシエーションの活動も見られ、そこには地域社会に関係が深い活動もあれば、職域社会に関係が深い活動もあるが、自主的な活動も展開している。さらに、社会関係においても、親しい友人や近所の人をはじめとして多様な関係を多様に結んでいる。親しい友人や近所の人々の存在は、高齢者の生活の中では、きわめて重要な位置を占めている。これらの社会活動は、健康状態、学歴、職歴(就業状態)、階層意識などによって影響をうける傾向があり、また、性別や年齢によっても影響をうける時があるが、必ずしも常にそうであるとは限らない。

* 東京都立大学研究センター

はじめに

高齢社会の問題の一つは、高齢者が「元気で充実した生活、いわば生き生きした生活ライフスタイル」を持つためにはどうすればよいか、ということである。これは、高齢者がこれまでとは異なる新しいライフスタイルを創出することであり、やや大げさに言えば、高齢者の新しい文化創造を試みることである。実際、今日の高齢者は、社会変動の激しい高齢社会に適応する新しいライフスタイルを身につけざるを得ない状況におかれている。例えば、定年退職してから、あまり馴染みのなかった地域生活において、自ら新しいライフスタイルを模索しているような状況はしばしば指摘される。この新しいライフスタイルの創出は、高齢者が長期にわたって蓄積してきたさまざまな能力を活用したり、あるいは新しい能力を開発するという問題とも密接に関連していることはいうまでもないであろう。

われわれは、これまで、東京都立大学都市研究センターのプロジェクト研究「大都市高齢社会の問題状況と政策課題の総合的研究」の一環として、この高齢者の新しいライフスタイルの創造を促す諸条件を探ることを目的とした調査研究を行ってきた。その一つとして、1989年に東京都の台東区と目黒区の高齢者を対象とした「大都市高齢者の文化創造に関する調査」（調査票による面接調査、「総合都市研究」39、1990.3）を行なったが、今回、これにひきつづき「大都市高齢社会の新しい生活スタイルに関する調査」を実施した。本稿はこの調査結果の概況をとりまとめたものである。

「大都市高齢社会の新しい生活スタイルに関する調査」は、1991年5月、東京都心（23区）に在住する60歳から75歳までの高齢者を対象にサンプル抽出し、調査票法による郵送法によって行なわれた。通常いわれるように、郵送法では回収率が低くなることが予想されたため、一定のサンプル数を確保する必要から7000票を郵送したのだが、返送は4627票（有効票4607）を数え、回収率は

66.1%に達し、非常に高かった。この回収率の高さそれ自体、高齢者の社会的態度の特徴といえるかも知れない。

調査票は、余暇活動、外出行動、集団参加、家族・親族状態、家族観、社会関係（交際）、モラル、および基本的属性の調査項目によって構成されている。この調査研究の結果については、個別的問題を分析した報告論文がすでに発表されているし*、これからも発表される予定であるが**、本稿は、高齢者の性別・年齢^(注)の二つの属性を軸にして、調査結果を整理し、全体を概括して報告することを第一の目的としつつも、あわせて、特に高齢者の社会活動（余暇活動、集団参加、社会関係）の全体像をとりまとめようと試みたものである。

^(注)年齢別の分析は5歳別のコーホートによって行なったが、サンプルは60～75歳なので、75～79歳のコーホートは75歳だけのコーホートとなり比較のカテゴリーにはならない。しかし、本論では一応、集計結果の数値を掲げ、考慮に入れた。以下、この点に特に留意する必要がある。

* 浅川達人・高橋勇悦「都市居住高齢者の社会関係の特質」（「総合都市研究」45号、1992.3）、安藤究・高橋勇悦「大都市高齢女性の祖母性」（「総合都市研究」45号、1992.3）。

** 森岡清・中林一樹編『大都市高齢者のライフスタイル』（仮題）、近刊。

1 東京都心部（23区）の高齢者 —基本的属性—

年齢・性別 1991年の東京都23区の60歳以上75歳未満の人口構成は、住民基本台帳（表1）によれば、図1のような逆梯形の構成となっていて、年代別の構成比は、加齢とともに減少している。年代別の性比は、60歳以降どの年代も100以下となり、加齢とともに女性が男性を大きく上回る傾向にある。これは男女の平均寿命の差であることはいうまでもない。われわれの調査対象は、選挙人名簿を母集団としてサンプルを抽出しているが、返送された有効票の年齢構成は、やはり逆梯形の

表1 東京都23区の60歳以上の人口（／万、1991）とサンプル構成

	人 口	男 性	女 性	サンプル	男 性	女 性
60～64歳	36.1(421)	38.6(195)	34.1(226)	37.5(1726)	39.9(868)	35.3(858)
65～69	27.8(324)	27.3(138)	28.1(186)	34.3(1579)	34.3(748)	34.2(831)
70～74	20.2(236)	19.0(96)	21.1(140)	26.3(1213)	24.1(525)	28.3(688)
75	16.0(186)	15.0(76)	16.6(110)	1.9 (89)	1.7 (37)	2.1 (52)
合 計	100.0(1167)	100.0(505)	100.0(774)	100.0(4607)	100.0(2178)	100.0(2429)

東京都統計協会「東京都の人口」1991。サンプルの年齢構成については本文の注を参照。

表2 健康状態

	非常に健康	無理はきかない	病気がち	寝ていることが多い	その他	無記入
全 体	25.5	58.8	8.5	1.2	4.9	1.1
男 性**	31.1	53.6	7.5	1.2	5.4	1.2
女 性	20.4	63.4	9.4	1.3	4.5	0.9
60～64**	30.2	57.2	6.4	0.8	4.4	0.9
65～69	25.3	59.5	9.0	1.2	4.5	0.5
70～74	19.8	59.7	10.7	1.5	6.3	2.1
75	13.5	62.9	11.2	7.9	3.4	1.1

** χ^2 検定 1%有意

構成となっていて、年代別の構成比も、加齢とともに減少している。性比は、60代前半を除いて、100以下になっている（表1・図1）。

両者を比較してみるかぎり、サンプル構成では、60代前半の性比は100以下になっていることが知られる。このサンプルの歪みは、一つには、就業状態や健康状態などとの関係における調査回答者の減少が影響していると思われる。ちなみに、調査票の返送率は、単純に計算された期待度数にてらしてみると、75歳を除いて概ね男性が女性よりも高かった。

調査対象のサンプル構成はこのような特徴を持っている。

健康状態 健康状態からみていこう。健康状態は、「非常に健康」26%、「無理はきかない」59%の状態にあって、ともかくも健康な高齢者は85%におよび、「元気老人」が多く、「病気がち」8.5%、「寝ていることが多い」1.2%は少なくなっている。年代別では、加齢とともに、「非常に健康」は

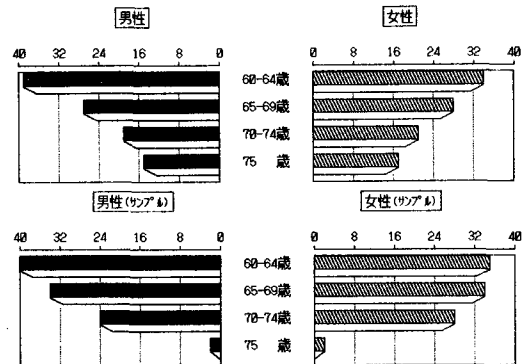


図1 東京23区の人口構成とサンプル構成

減少し、「無理はきかない」、「病気がち」、「寝ていることが多い」が増加する傾向にある。この点から言えば、健康な高齢者がより多く回答した傾向がうかがえる（表2）。

居住年数 都心部の現住所に、「生まれてから」3.4%、あるいは「戦前から」8.6%など、少なくとも50年以上も居住している高齢者は12%である

が、都心部の激動の歴史を考えれば、これは小さな比率とは必ずしも言えないかも知れない。もっとも多いのは「20年以上」55%で半数をこえ、ついで「10～20年未満」15.4%、10年未満は16.8%である。いずれにせよ、20年以上の長期居住者、いわば旧住民が7割近くにおよび非常に多い(表3)。

学歴 学歴をみると、低学歴(旧制小学校8.7%、旧制高小・新制中学28.5%) 37.2%、中学歴(旧

制中学・新制高校) 39%、高学歴(旧制高校・大学) 23%となっており、戦前・戦後にわたる昭和時代の進学状況を反映している。高学歴23%はもっとも少なくなっているが、今日とは異なる進学状況を思えばむしろ大きい比率(1970年現在で東京23区の短大・大学卒業16.6%)で、しかも、男女別の差も大きく、高学歴は、男性35.8%でもっとも多く、女性10.5%でもっとも少なくなっている(表4)。これは東京都心部の特色というべきも

表3 居住年数

	全 体	男 性 女 性**		60～64歳 65～69 70～74 75			
5 年未満	8.0	7.3	8.6	8.7	6.7	7.7	20.2
5～10年未満	8.8	9.1	8.4	9.7	8.8	7.8	2.3
10～20年未満	15.4	17.1	13.9	18.8	15.6	10.9	6.7
20年以上	54.6	51.8	57.2	52.9	55.3	56.3	53.9
戦前から	8.6	8.4	8.7	5.7	8.6	12.4	11.2
生まれてから	3.4	5.2	1.7	3.2	3.9	3.0	4.5
無記入	1.2	1.0	1.4	0.9	1.1	1.8	1.1

** χ^2 検定 1%有意

表4 学歴

	全 体	男 性 女 性**		60～64歳 65～69 70～74 75			
旧制小学	8.7	6.2	10.9	4.5	8.6	14.5	10.1
高小中学	28.5	28.4	28.5	25.7	28.3	32.0	34.8
旧中新高	38.9	28.6	48.3	42.7	38.1	35.0	34.8
旧高新大	22.5	35.8	10.5	26.1	23.6	16.3	19.1
無記入	1.4	0.9	1.8	1.0	1.2	2.1	1.1

** χ^2 検定 1%有意

表5 住居形態

	全 体	男 性 女 性		60～64歳 65～69 70～74 75			
一戸建て持ち家	67.3	68.8	66.0	64.1	68.8	70.2	65.2
分譲マンション持ち家	10.1	10.4	9.8	11.6	11.7	6.2	5.6
一戸建て貸家	3.0	2.8	3.2	3.5	2.2	3.4	5.6
賃貸マンション・アパート	15.8	14.4	17.1	16.7	13.7	16.7	22.5
社宅・官舎	1.1	1.2	0.9	1.6	0.9	0.7	0.0
間借り	1.4	1.3	1.4	1.5	1.1	1.6	0.0
その他	0.5	0.4	0.6	0.4	0.7	0.3	0.0
無記入	0.8	0.7	0.9	0.5	1.0	0.9	0.0

** χ^2 検定 1%有意

のであろう。

住宅 現在、高齢者は持家77%、借家21%で、多くは持家に居住している。高齢者であるだけに、持家が多いのは当然なのであろうが、借家も少ないとは言えないであろう。持家では一戸建67%が多く、これに分譲マンション10%が加わる。借家21%には賃貸マンション・アパート16%、貸家3%、その他3%が含まれている(表5)。

世帯収入 高齢者の世帯収入は、低所得層(4百万以下)38%、中所得層(8百万以下)30%、高所得層(8百万以上)24%であるが、男性が女性より世帯収入の状態はよくなっている。男性は低所得層33%、中所得層34%、高所得層29%であるのに対し、女性はそれぞれ42%、26%、20%で、男性より低い方へ傾いているのである。これは、男性に比較して、女性に配偶者がいない世帯が多いこと、就業していない女性が多いこと等に起因していると思われる。さらに、年代別でみると、高齢になるほど低所得層が増え気味で、中所得層も減少・停滞の傾向にあり、高所得層ははっきり

と減少する(表6)。

暮らし向き こうした中での暮らし向きは、「上」2%、「中」83%、「下」10%、で「中」がもっとも多くなっている。この「中」の比率(「中の上」13.2%、「中の中」42.5%、「中の下」26.8%)は、成人全体のこの種の調査の「中」(総理府「国民生活に関する世論調査」1991では約90%)と比較すると、低い比率である。年代別では、大体において、暮らし向きは加齢とともに下方に傾斜していく傾向が見られる。男女の差をみると、「上」と「中の上」は、男性が女性よりやや多くなっている(表7)。

2 家族・親族

配偶者と家族形態 有配偶者の高齢者73%は多く、無配偶者22%は少ないが、男性91%と女性58%では、有配偶者の比率の落差は非常に大きい。女性は、男性より長寿であるせいもあり、結婚未経験の女性も含めて、無配偶者42%はかなり多い。

表6 世帯収入

	全 体	男 性 女 性**		60~64歳	65~69	70~74	75
		男	女				
~2百万	12.0	7.0	16.4	8.2	12.5	16.5	13.5
~4百万	25.9	25.8	26.0	23.9	26.2	28.1	29.2
~6百万	17.8	20.1	15.6	18.7	18.0	16.2	15.7
~8百万	12.2	14.3	10.2	13.3	12.5	10.2	12.4
~1千万	8.7	9.4	8.1	10.5	8.2	7.3	0.0
1千万~	15.5	19.9	11.5	19.2	14.8	11.3	12.4
無記入	8.1	3.5	12.2	6.3	7.8	10.4	16.9

** χ^2 検定 1%有意

表7 暮らし向き

	全 体	男 性 女 性**		60~64歳	65~69	70~74	75
		男	女				
上	2.0	2.7	1.4	2.2	2.1	1.6	3.4
中の上	13.2	15.0	11.7	13.6	13.5	12.8	7.9
中の中	42.5	42.2	42.7	45.3	42.7	38.0	44.9
中の下	26.8	27.7	26.0	25.3	26.3	29.4	29.2
下	10.2	9.0	11.2	9.8	10.2	11.1	4.5
無記入	5.3	3.4	7.0	3.8	5.3	7.1	10.1

** χ^2 検定 1%有意

高齢になるに従い有配偶者は減少し、無配偶者が増加していることは指摘するまでもない(表8)。

家族形態は、夫婦だけの家族35%、未婚の子供と暮らしている家族26%が多くなっているが、自分ひとりの一人世帯も12%を占めている。形態からいえば、核家族は73%におよぶことになる。一方、子供夫婦と同居16%、親と未婚の子供と同居3%、親と子供夫婦と同居2%などの世代家族はしめて20%になる。これらの家族は、いうまでもなくすべて高齢者を含む家族であり、したがって、核家族や世代家族といっても、それぞれ独自の意味を持っていることに特に留意しておくべきであ

表8 配偶者の有無

	い	る	現在はい	結婚した	無記入
			ない	事はない	
全 体	73.4	22.1	3.8	0.7	
男 性**	91.1	7.3	1.1	0.5	
女 性	57.6	35.4	6.2	0.5	
60~64**	80.0	15.0	4.6	0.4	
65~69	72.4	22.9	4.0	0.8	
70~74	66.4	30.3	2.5	0.7	
75	60.7	34.8	1.1	3.4	

** χ^2 検定 1%有意

表9 家族の形態

	ひとりだ	夫婦だけ	夫婦と未	夫婦と子	親と未婚	親と子供	その他	無記入
	け		婚の子供	供夫婦	の子供	夫婦		
全 体	12.0	34.6	26.2	15.8	2.7	1.8	5.9	1.0
男 性**	5.2	42.5	31.5	12.4	2.8	0.8	4.2	0.6
女 性	18.1	27.5	21.4	18.8	2.7	2.6	7.5	1.3
60~64**	9.7	34.2	34.9	9.0	3.8	1.2	6.4	0.9
65~69	13.6	36.2	23.1	16.5	1.5	1.9	6.1	1.0
70~74	12.5	33.9	18.6	23.5	2.7	2.6	5.3	0.9
75	19.1	24.7	16.9	29.2	3.4	1.1	3.4	2.2

** χ^2 検定 1%有意

ろう。

性別では、男性に多い家族形態は、核家族であるが、女性に多い家族は、単身の一人世帯か、世代家族、「その他」の家族である。男性より女性の平均寿命が一層長くなった影響が家族形態にもおよんでいる。年代別では、夫婦だけの家族や未婚の子供と同居は減少し、かわって子供夫婦と同居、単身の一人世帯が増加する。年代が進むにしたがって家族形態が変化していく過程を鮮明に示している(表9)。

生計・家事の担い手 この家族形態と関連するが、生計の担い手が本人の高齢者になっている場合52%が半数以上を占め、家事の担当が本人の高齢者になっている場合41%も少なくない。もっとも、家計の担当は男性85%が圧倒的に多く(女性22%)、家事の担当は女性70%が圧倒的に多くなっ

ていて(男性9%)、現在の高齢者世帯における男女の役割分業が明確に認められる。いずれにしても、しかし、加齢とともに、生計の担当、家事の担当も、高齢者から離れていく傾向も見られる(表10)。

子供と孫 別居の子供がいる高齢者は76%、いない高齢者は22%であるが、近居の子供がいる高齢者は50%、いない高齢者は44%であって、別居の子供をもつ高齢者は多いものの、当然ながら、近居の子供をもつ高齢者はそれよりは少なくなっている。しかし、約半分の高齢者が近くに住む子供をもっていることは、留意しておきたい。これは東京都心部の特色なのだろうか。別居の子供と近居の子供の有無は男女に差はないが、年代には差が見える。加齢とともに、別居の子供、近居の子供をもつ高齢者の比率が、いずれも大きくなっ

表10 生計の担い手、家事の担当

	生計の担 い手	家事の担 当
はい	52.1	40.9
男性	85.3**	9.0**
女性	22.3	69.5
60～64	54.2**	43.6**
65～69	53.6	39.3
70～74	47.5	39.9
75	43.8	29.2
いいえ	38.7	50.0
男性	10.8	86.5
女性	63.8	17.2
無記入	9.2	9.1
男性	3.9	4.4
女性	14.0	13.3

** χ^2 検定 1%有意

表11 子供の有無

	別居の子	近居の子
いる	75.8	49.2
男性	76.1 *	50.3**
女性	75.5	48.3
60～64	68.9**	44.4**
65～69	77.6	50.2
70～74	82.6	54.2
75	84.3	58.4
いない	21.9	44.2
男性	22.3	44.5
女性	21.5	43.8
無記入	2.3	6.6
男性	1.7	5.2
女性	3.0	7.9

** χ^2 検定 1%有意* χ^2 検定 5%有意

ている(表11)。

孫のいる高齢者は68%になるものの、別居62%が多く、同居19%は少ない。「孫はいない」高齢者は29%である。高齢になるほど、孫をもつ比率が大きくなり、「孫はいない」比率が小さくなる。

孫の年齢は、幼児(0～5歳)29%、中学生

表12 孫の有無

	同居の孫 のみいる	別居の孫 のみいる	両方の孫 いる	孫はいな い	無記入
全体	5.8	49.3	13.1	28.7	3.0
男性**	5.2	50.1	9.2	32.9	2.6
女性	6.4	48.6	16.0	25.0	3.3
60～64**	4.7	44.3	6.4	41.3	3.3
65～69	6.5	51.7	13.3	25.8	2.7
70～74	6.4	53.4	21.6	15.7	2.9
75	7.9	49.4	25.8	13.5	3.4

** χ^2 検定 1%有意

表13 孫の年齢

	0～5歳	6～12歳	13～15歳	16～18歳	19歳以上	孫いない	無記入
全体	28.7	12.7	21.4	10.5	11.1	12.3	2.8
男性**	32.0	17.6	24.2	9.5	7.9	5.4	2.5
女性	25.0	8.2	19.4	12.0	13.9	18.5	3.0
60～64**	20.5	23.8	5.6	3.7	2.0	41.3	3.3
65～69	11.0	25.6	14.4	11.5	8.9	25.8	2.7
70～74	4.5	14.7	13.8	20.5	28.7	15.7	2.2
75	2.2	5.6	10.1	18.0	49.4	13.5	1.1

** χ^2 検定 1%有意

(13～15歳)21%、小学生(6～12歳)13%、大学生の年齢(18歳)以上11%、高校生の年齢(16～18歳)11%の順にならぶが、指摘するまでもなく、高齢になるほど、より年上の孫を持つことになる(表12・13)。

子供や孫の有無や近居の有無は、高齢者の社会関係に影響してくることはいうまでもなからう。

3 就業状態

50歳の時の就業 50歳の頃に就業(「働いている」)していた高齢者は80%、非就業(「働いていない」)であった高齢者は17%で、大多数の高齢者は就業している。男性98%はほとんどが就業し、女性63%も半数以上が就業している(表14)。

その就業形態は、自営・雇用層(商工自営層25%

表14 50歳時就労有無

	全 体	男 性 女 性**		60~64歳	65~69	70~74	75
		男	女				
働いている	79.8	98.3	63.2	82.2	80.2	76.0	76.4
働いていない	17.0	0.6	31.7	15.9	16.8	18.6	19.1
無記入	3.2	1.1	5.1	1.9	3.0	5.4	4.5

** χ^2 検定 1%有意

表15 50歳時の就業形態

	全 体	男 性 女 性**		60~64歳	65~69	70~74	75
		男	女				
自営業主	22.4	23.2	21.8	2.4	2.5	2.2	2.2
自由業	2.4	3.7	1.2	16.9	15.3	12.0	14.6
経営者・役員	15.0	28.5	2.9	6.1	5.5	5.1	3.4
専門職	5.6	7.8	3.6	8.3	8.5	6.6	4.5
事務的職業	7.8	8.3	7.5	6.0	5.1	4.9	6.7
営業・販売	5.4	5.6	5.3	10.0	8.2	8.9	5.6
現業・技能職	9.0	15.9	2.8	0.8	1.3	1.1	1.1
保安的職業	1.0	2.1	0.1	9.3	8.6	10.1	3.4
パート	9.2	1.6	15.9	18.8	21.3	27.0	32.6
無記入・非該当	22.1	29.3	38.9	21.4	23.6	22.2	25.8

** χ^2 検定 1%有意

表16 50歳時の勤務先の従業員数

	全 体	男 性 女 性**		60~64歳	65~69	70~74	75
		男	女				
1~4人	20.9	22.0	19.9	22.0	21.3	18.8	21.3
5~29人	18.6	20.1	17.2	19.4	18.4	17.6	19.1
30~299人	13.7	17.9	9.9	15.3	12.3	5.4	12.2
300~999人	5.2	7.7	2.9	5.0	5.4	11.2	6.9
1000人以上	10.2	16.5	4.5	9.8	11.2	9.6	3.8
官公庁	6.0	9.8	6.0	6.8	6.9	3.8	4.5
無記入・非該当	25.4	5.9	42.9	21.6	24.4	31.7	32.6

** χ^2 検定 1%有意

と経営・管理者層15%) 40%、ホワイトカラー13.4%、ブルーカラー9%、グレイカラー6.4%の被雇用層29%、嘱託・パート等9.2%、そして、無記入(無記入・非該当)22.1%となっている。自営・雇用層が多いのは、50歳という年代(独立・自営や役員昇進の年代)の就業形態であるためと思われる。ホワイトカラーがブルーカラーやグレイカラーより多いのは、やはり東京都心の特徴であろう。もちろん男女別で大きな相違がある。男性に多い経営・管理者層やブルーカラーは女性に

少なく、女性に多いのは嘱託・パート等や無記入・非該当(非就業)である。商工自営層は男女に大きな差はない(表15)。

就業先の従業員規模は、零細企業(4人以下)21%、小規模企業(5人から29人以下)18.6%、中企業(30人以上300人以下)13.7%、大企業(300人以上)15.4%、官公庁6%、無記入・非該当25.4%である(表16)。

現在の就業状態 50歳の頃の就業は80%におよんでいたが、現在の就業53%は減少し、非就業45%

表17 就業の有無

	全 体	男 性 女 性**		60～64歳	65～69	70～74	75
働いている	53.4	71.7	37.0	67.1	51.6	37.8	32.6
働いていない	28.5	27.3	60.7	31.9	47.1	59.3	64.0
無記入	1.7	1.0	2.3	0.9	1.4	3.0	3.4

** χ^2 検定 1%有意

表18 就業形態

	全 体	男 性 女 性**		60～64歳	65～69	70～74	75
自営業主	16.6	20.1	13.5	19.1	16.9	13.1	11.2
自由業	3.1	4.8	1.5	3.4	3.2	2.5	3.4
経営者・役員	9.5	16.9	2.8	11.8	9.1	6.7	10.1
管理職	2.2	4.3	0.4	3.6	2.0	0.7	2.2
正規社員	4.6	7.1	2.4	8.2	3.7	0.9	0.0
パート	16.4	17.5	15.3	19.8	16.1	12.6	5.6
無記入・非該当	47.6	29.3	64.1	34.1	49.1	63.6	67.4

** χ^2 検定 1%有意

表19 週労働日数

	全 体	男 性 女 性**		60～64歳	65～69	70～74	75
5日以上	38.1	54.3	23.5	50.3	36.8	23.6	20.2
3～4日	10.6	13.2	8.2	12.6	10.6	8.2	4.5
1～2日	3.7	3.4	3.9	3.4	3.5	4.2	5.6
無記入・非該当	47.7	29.1	64.3	33.8	49.1	64.1	69.7

** χ^2 検定 1%有意

が増加している。非就業は特に女性61%に増加していて、男性72%の多くは依然として就業している。しかし、高齢者の就業は、60代前半から75歳に至る間に、加齢とともに、67%、52%、38%、33%と大きく減少し、逆に非就業が大きく増加するという傾向がはっきり現れている(表17)。

その就業形態も大きく変化し、とりわけホワイトカラー・ブルーカラー・グレイカラー等の正規社員・職員5%、つまり被雇用者が激減した。増加したのは、無記入・非該当48%であり、嘱託・パート等16%である。商工自営業層20%と経営・管理者層12%の自営・雇用層のいずれも減少したが、被雇用者と比較すれば、その減少の数は小さい(表18)。自営・雇用層の就業は持続され、雇用者の就

業は持続しない(退職)傾向が強いが、これは高齢者の余暇活動に大きく影響することになる。

就業者の週労働日数は、5日以上38%、3～4日11%、1～2日が3.7%で、就業者の多くは5日以上就業している。ただし、年代の差が大きく、高齢ほど、5日以上や3～4日の就業日数は減少し、1～2日や非就業が増加している(表19)。

配偶者の現在の就業では、非就業37%が就業34%よりわずかに多い(他は無配偶者26%、無記入3%)のであるが、本人が男性の場合その配偶者・女性に非就業53.1%が多く、本人が女性の場合その配偶者・男性に就業32%が多い(表20)。その就業形態は、無記入66%を別とすれば、自営・雇用層20.5%、被雇用層3%、嘱託・パート等層

表20 配偶者の就業の有無

	全 体	男 性 女 性**		60~64歳	65~69	70~74	75
働いている	34.1	36.6	31.8	45.1	31.0	23.6	18.0
働いていない	37.4	53.1	23.3	33.2	39.6	40.1	41.6
配偶者はいない	26.0	8.5	41.7	19.7	27.0	33.1	36.0
無記入	2.5	1.8	3.1	2.0	2.3	3.2	4.5

** χ^2 検定 1%有意

表21 配偶者の就業形態

	全 体	男 性 女 性**		60~64歳	65~69	70~74	75
自営業主	12.8	13.8	11.9	15.0	12.6	10.1	9.0
自由業	1.5	1.0	2.0	2.1	1.4	1.1	
経営者・役員	5.3	4.3	6.2	6.8	5.0	3.5	5.6
管理職	1.2	0.7	1.6	2.2	0.8	0.4	
正規社員	2.8	3.2	2.4	4.8	2.0	1.1	1.1
パート	10.1	13.3	7.2	13.7	8.7	7.2	2.2
無記入・非該当	66.3	63.7	68.7	55.4	69.4	76.8	82.0

** χ^2 検定 1%有意

10%となっていて、本人の場合と、傾向は類似している(表21)。

50歳の頃と現在の就業形態を比較すれば次のようになる。

	50歳	現在
A. 自営・雇用層	40%	31.4%
(1)商工自営層	25%	19.7%
(自営業主・家族従業員、自由業)		
(2)経営・管理者層	15%	11.7%
(経営者・役員・管理職)		
B. 被雇用層	29%	4.6%
(3)ホワイトカラー	13%	—
(事務・専門・専門技術職)		
(4)ブルーカラー	9%	—
(現業・技能職)		
(5)グレイカラー	6%	—
(営業・販売・サービス、保安)		
C. 嘱託・パート等	9%	16.4%
D. 無記入・非該当	22%	47.6%

4 余暇活動

余暇活動は、一応、定期的か日常的な余暇活動(定期的、あるいは月に一回以上行なったもの)と、不定期か非日常的な余暇活動(1年間で行なったことのあるもの)にわけてある。

定期的ないし日常的な余暇活動 定期的・日常的な余暇活動としては、「趣味」67%がとびぬけて多く、「ゲーム」20%、「スポーツ」30%、「居酒屋」22%、「図書館」18%、「文化講演」15%、「趣味教室」17%などは、これに比較すると、かなり少ない。「スポーツ」が30%に達しているものの、他は20%前後以下である。高齢者は「一人で趣味を楽しむ」余暇活動がもっとも普通のパターンで多く、高齢者の余暇活動は「趣味」を中心に多様化していることになる。もちろん、「一人で楽しむ趣味」といってもそれ自体多様であることはいうまでもない。

この余暇活動は、男女別、年代別で、差が生ずる場合がある。男性が女性より多く選好する余暇活動は、「居酒屋」(34:11)、「ゲーム」(26:14)、

表22 余暇活動（定期的または月に1回以上、この1年間よく行なったもの）

	趣味を楽しむ	ゲームを楽しむ	スポーツをする	居酒屋に出かける	図書館に出かける	文化講演会 市民大学に参加	趣味教室 に参加
した	66.8	19.9	30.0	21.7	17.6	15.0	17.3
男性	64.4**	26.4**	32.4**	33.7**	19.3**	12.9**	8.1**
女性	69.0	14.0	27.8	11.0	16.1	16.8	25.6
60～64	67.6	20.3	31.1 *	30.0**	17.6	14.1 *	17.3 *
65～69	67.6	20.5	30.6	20.0	18.2	15.8	18.9
70～74	64.8	18.9	28.1	13.2	16.9	14.8	15.7
75	62.9	14.6	22.5	7.9	15.7	19.1	14.6
しなかった	28.4	70.6	62.5	70.1	74.1	76.7	74.9
無記入	4.8	9.5	7.5	8.2	8.3	8.3	7.7

** χ^2 検定 1%有意 * χ^2 検定 5%有意

- (ア)一人で趣味（読書、手芸、盆栽の手入れ、模型づくりなど）を楽しむ。
 (イ)将棋や囲碁、トランプ、マージャンなどのゲームを楽しむ。
 (ウ)体操、テニス、ゲートボールなどのスポーツをする。
 (エ)居酒屋やスナックに飲みに出かける。
 (オ)図書館に出かける。
 (カ)文化講演会や市民大学に参加する。
 (キ)一般に公開されている趣味の教室（カルチャーセンターなど）に参加する。

「スポーツ」（32：28）、「図書館」（19：16）であり、女性が男性より多く選好する余暇活動は、「趣味教室」（8：26）、「趣味」（64：69）、「文化講演」（13：17）である。

また、これらの余暇活動は、年代を重ねるにつれて、概して、比率が下がる傾向も見られる（表22）。

不定期ないし非日常的な余暇活動 不定期・非日常的な余暇活動では、1年間に行なった余暇活動の総量のせい、高い比率を示す余暇活動が多い。すなわち、神社・仏閣の参詣85%、繁華街での買い物・ショッピング83%、国内旅行80%は、いずれも80%以上の高率を示し、観劇・映画・音楽会58%、博物館・美術館52%も半数を越え、スポーツ40%、海外旅行22%がこれに続いている。

神社・仏閣の参詣、繁華街での買い物・ショッピング、国内旅行は、不定期・非日常的な余暇活動のベストスリーであり、回数からみても、これらのベストスリーはどのレベルにおいても上位にある。

男性と女性の間で比率の差がある余暇活動は、観劇・映画・音楽会（男性49：女性66）、スポーツ（48：33）、繁華街での買い物・ショッピング（76：88）である。

これらの余暇活動にも、定期的・日常的な活動と同じように、年代を重ねるにつれて、比率が下がる傾向の余暇活動、例えばスポーツ22.5%、繁華街での買い物・ショッピング10.4%、国内旅行7.2%などがある。しかし、海外旅行、観劇・映画・音楽会、博物館・美術館、神社・仏閣などは、年代を重ねても、比率はあまり変わらない余暇活動である。高齢者の余暇活動の展開を考えると、年齢にあまり関係なく行われる余暇活動には注目しておく必要があろう。

こうしたなかで、神社・仏閣の参詣は、不定期・非日常的ながら、余暇活動の筆頭にあつて、あまり男女別や年代別に関係なく展開する余暇活動ということになる。東京巣鴨のとげぬき地蔵の参詣の賑わいは、このような高齢者の余暇活動によって支えられているのであろう（表23）。

表23 余暇活動（不定期的、この1年間に行なったもの）

	国内旅行 に行った	海外旅行 に行った	繁華街に 買い物	観劇映画 音楽会	博物館・ 美術館	神社・仏 閣に参拝	スポーツ に行った
ある	80.2	22.0	82.5	57.8	51.9	85.1	40.0
1回はある	25.2	13.4	10.0	20.9	22.1	17.9	12.5
数回はある	49.8	7.9	47.3	32.3	26.4	52.3	19.9
10回以上ある	5.2	0.8	25.2	4.6	3.4	14.9	7.6
男性	81.3 *	23.6**	76.1**	48.5**	49.7**	83.2**	48.2 *
女性	79.2	20.6	88.3	66.1	53.9	86.8	32.6
60～64歳	81.4**	22.2**	85.7**	58.2 *	52.8**	84.8**	47.3
65～69	81.2	23.1	83.7	60.0	52.2	86.4	38.8
70～74	77.6	20.2	76.6	54.3	50.2	84.0	32.0
75	74.2	23.5	75.3	58.5	52.8	80.9	24.8
ない	17.5	73.4	14.9	38.4	43.5	12.5	55.0
無記入	2.3	4.6	2.5	3.8	4.6	2.4	5.0

** χ^2 検定 1%有意、* χ^2 検定 5%有意

(7)温泉や観光地に泊まりがけの国内旅行に出かけたことはありますか。

(1)海外旅行に出かけたことはありますか。

(2)繁華街のデパートに出かけて、買い物やウィンドウショッピングをしたことはありますか。

(3)観劇・映画・音楽会などに出かけたことはありますか。

(4)博物館・美術館などに出かけたことはありますか。

(5)神社・仏閣のお参りに出かけたことはありますか。

(6)ハイキングや釣り、ゴルフなどのスポーツに出かけたことはありますか。

外出行動の障害 余暇活動のために、高齢者が外出するとき、しばしば問題になるのは、外出行動に支障をきたす都市環境の問題である。東京のような大都市は若者向きにできていて、高齢者向きにはできていないとはしばしば言われることである。

東京都心部の高齢者が外出したときに直面する問題はいろいろある。地下鉄の入口・出口、階段や歩道橋、駅のトイレ、バスの行き先・乗り場、デパートや地下街の方角、ベンチなどの休む場所、人混みに押される危険などの問題である。どの問題も10%～30%の高齢者が経験している。これらの問題は高齢者だけでなくも経験することが多いと思われるが、それだけに高齢者の場合は特に困る度合いが強くなるといっているであろう（表24）。

5 集団参加

集団参加については、地域集団を代表とするとされる町内会・自治会への参加・加入と、この町内会・自治会に縁が深く、高齢者関係の地域集団を代表すると思われる老人会・老人クラブへの参加・加入を調査している。

町内会・自治会参加 町内会・自治会には、65%は加入しており、30%は加入していないと回答している。加入している高齢者が多数派ということになるが、この加入している高齢者のうちには、役員経験者26%と役員無経験者39%が含まれている。役員経験者が多いのは、やはり地域社会に長期にわたって居住している高齢者が多いからであろう。役員経験者が女性より男性にやや多いとい

表24 外出したときに困った事（この1年間）

	な い ある		男 性 女 性		60～64歳 65～69 70～74 75			
A	79.5	20.5	26.0	15.6 **	21.1	20.1	20.5	15.7
B	80.8	19.2	18.9	19.4	18.9	19.5	19.0	20.2
C	71.8	28.2	26.8	29.5 *	26.2	30.8	27.5	31.5 *
D	72.3	27.7	21.3	33.5 **	22.6	26.5	35.4	46.1 **
E	89.4	10.6	9.5	11.7 *	9.7	10.4	11.8	16.9
F	81.7	18.3	16.4	20.0 **	17.7	20.0	17.2	15.7
G	82.4	17.6	15.7	19.3 **	15.0	18.5	20.0	18.0 *

** χ^2 検定 1%有意, * χ^2 検定 5%有意

- A 駅などにトイレが少なく困った
 B バスの行き先や乗り場がわからなくなった
 C 地下鉄の入り口や出口がわからず迷った
 D 階段や歩道橋の昇り下りがきつかった
 E 人混みの中で押される等の危険な目にあった
 F デパートや地下街でわからなくなった
 G ベンチなど休む場所がなかった

表25 地域団体への加入と役員経験

	町内会・自治会				老人会・老人クラブ			
	加入・役員経験有	加入・役員経験無	加入してない	無記入	加入・役員経験有	加入・役員経験無	加入してない	無記入
全 体	26.0	39.2	30.2	4.6	5.9	13.2	75.8	5.2
男 性	27.9**	39.0**	30.3**	2.8**	4.0**	9.5**	82.5**	4.0**
女 性	24.3	39.4	30.2	6.1	7.6	16.5	69.7	6.2
60～64	25.3**	39.4**	32.2**	3.1**	1.8**	6.5**	87.0**	4.8**
65～69	26.0	39.4	30.9	3.7	6.1	12.6	77.3	4.0
70～74	27.0	39.6	26.4	7.0	11.0	22.5	59.5	7.0
75	27.0	27.0	31.5	14.6	11.2	24.7	53.9	10.1

** χ^2 検定 1%有意

うこと以外は、町内会・自治会参加に男女別の相違はない。町内会・自治会の役員は、大概の場合、男性が多いことは周知の通りである。また、町内会・自治会は、原則としては任意加入の団体とされるが、通常は地域に居住すれば自動的に加入するというシステムになっているから、加入率が高いといっても、必ずしも積極的な加入を意味するわけではない（表25）。

老人会・老人クラブ参加 この町内会・自治会参加に対して、老人会・老人クラブへの加入は、自動的に加入するというシステムにはなっていないから、事情は基本的に異なっている。老人会・老人クラブへは、19%が加入、76%が非加入で、加入している高齢者は少数派であり、町内会・自治会とは逆の状況にある。東京都の老人クラブ加入率は、1991年では全国最低の22.9%の加入率になっているが（厚生省「社会福祉行政業務報告」1991）、東京都23区の都心部は、これよりさらに低いわけである。加入している高齢者には、役員経験者6%と役員無経験者13%が含まれているが、役員経験者も少ない。男女別には多少の差があつて、男性の加入14%よりも女性の加入24%が多く、

いから、事情は基本的に異なっている。老人会・老人クラブへは、19%が加入、76%が非加入で、加入している高齢者は少数派であり、町内会・自治会とは逆の状況にある。東京都の老人クラブ加入率は、1991年では全国最低の22.9%の加入率になっているが（厚生省「社会福祉行政業務報告」1991）、東京都23区の都心部は、これよりさらに低いわけである。加入している高齢者には、役員経験者6%と役員無経験者13%が含まれているが、役員経験者も少ない。男女別には多少の差があつて、男性の加入14%よりも女性の加入24%が多く、

逆に言えば男性の非加入83%が女性の非加入70%を上回っているが、この点も町内会・自治会とは異なっている。年代別では、非加入は加齢とともに減少する傾向にあり、裏返しになるが、加入・役員経験者と加入・役員無経験者は、加齢とともに増加する傾向にある(表25)。

地域団体・職域団体・自主団体 集団参加については、地域団体(主に地域の人でつくる団体やグループ)、職域団体(主に仕事仲間をつくる団体やグループ)、および、それら以外の自主団体(ここでは仮にこう呼ぶ。主に地域の人や仕事仲間以外の人とつくる団体やグループ)への、参加・加入についてもたずねている。それぞれの団体は、娯楽団体、スポーツ団体、教養団体、およびボランティア団体(社会奉仕団体)の4種の団体に分けられている。

これらの地域団体、職域団体、自主団体のいずれにおいても、娯楽団体は20%ほどの加入であり、他のスポーツ団体、教養団体、ボランティア団体は10%以下の加入という状況になっている。いずれにしても、加入率は高くはない。そうしたなかで、地域団体では、娯楽団体、スポーツ団体、教養団体は女性が男性より加入率が高くなる傾向を見せ、職域団体では、娯楽団体、スポーツ団体、教養団体、ボランティア団体のいずれにおいても、男性が女性より加入率が高くなる傾向を見せている。自主団体では、娯楽団体と教養団体で男性より女性の加入率が高く、スポーツ団体とボランティア団体で男性が女性より加入率が高く、いわばその中間の傾向を見せる。地域団体、職域団体、自主団体の、男女別にそれぞれの加入率の相違は男女の就業状態に深くかわかっていよう(表26)。

これらの団体はいわゆるボランティア・アソシエーション(Voluntary Association、以下単にV.A.と表記する)に相当する。これは、集団のメンバーが、共通の関心・利害を、メンバー自身の資源を活用しつつ、自発的・主体的に追及する集団と言っているであろう。V.A.のそのような特徴を考えれば、全体として、加入率が20%以下ではあるものの、それは別に異とするに足りない。むしろ、高齢者の間においても、多様なV.A.が展開

表26 加入団体

	娯楽団体	スポーツ団体	教養団体	ボランティア団体
(1) 合計	20.8	9.5	6.2	8.9
地域団体男性	17.1	8.4	4.4	8.9
女性	24.1	10.4	7.9	8.8
(2) 合計	20.0	7.6	4.8	5.2
職域団体男性	24.5	11.0	5.5	5.7
女性	15.9	4.6	4.2	4.7
(3) 合計	20.9	8.6	6.1	5.7
自主団体男性	18.3	10.7	5.1	5.9
女性	23.3	6.8	7.1	5.6

(1) 地域の人でつくる団体への加入

(2) 仕事仲間をつくる団体への加入

(3) 地域・仲間以外の人とつくる団体への加入

していることの意義は大きいといわなければならない。

6 高齢者の社会関係

近居の人 高齢者の社会関係(ネットワークといってもよい)は、大きく、親族(別居の子、兄弟姉妹、義理の兄弟姉妹、他の親戚)、友人、近所の人の3つの社会関係に分けて考えることにするが、まず確認したいのは、近居の子、兄弟姉妹、義理の兄弟姉妹、その他の親戚、および親しい友人が、近くに居住しているかどうかである。高齢者の近くに居住している人は、親しい友人56%、子供49%、親戚46%、兄弟姉妹31%、義理の兄弟姉妹26%の順に多い。親しい友人(近所の人と重複しているかも知れない)が親族をこえて第一位に登場すること、子供、親戚、兄弟姉妹等の親族も決して少なくないことなど、注目に値しよう。近居の人で男性に多いのは、別居の子、兄弟姉妹、義理の兄弟姉妹、他の親戚の親族であり、近居の人で女性に多いのは、親しい友人であって、男女別の差が見られるのだが、高齢者の男女に社会関係の差がある事実も、社会活動の展開からみて、これまた注意しておく必要がある。年代別では、

表27 親戚・友人の近居

	兄弟姉妹	義兄妹(1)	親	友	人
住んでいる	30.6	26.3	45.7	55.7	
男性	31.5*	31.8**	46.1**	45.6**	
女性	29.8	21.4	45.3	64.7	
60～64	31.7**	28.8*	46.6*	55.2**	
65～69	30.0	24.9	43.6	54.3	
70～74	30.3	24.5	47.2	57.5	
75	23.6	27.0	43.8	62.9	
住んでいない	58.5	63.1	48.6	32.7	
男性	58.3	62.8	49.2	42.1	
女性	58.7	63.4	48.0	24.2	
いない	8.2	2.5	2.5	9.0	
無記入	2.7	8.1	3.3	2.7	

** χ^2 検定 1%有意、* χ^2 検定 5%有意

(1)配偶者の兄弟姉妹。なお・近居の子供については「子供の有無」を参照。

年代があがるにつれて、兄弟姉妹の比率は小さくなっていき、親しい友人や近居の子の比率が高くなる傾向がある。義理の兄弟姉妹と親戚には、比率の増減が見られる(表27)。

社会関係 社会関係を交際(会って話をする)の頻度でみると、週単位の頻度の交際(週2～3回以上、週に1回程度)では、近所の人や親しい友人の比率が親族のそれをこえて高い。月単位の頻度の交際(月1～2回程度、2～3ヶ月に1回程度)では、親しい友人とならんで親族が浮上し、近隣の人は少なくなる。年1～2回程度の交際頻度になると、親戚と兄弟姉妹に高い比率が移行し、親しい友人、別居の子、近所的人是さらに少なくなる。1年間の間交際は「全くなかった」のは、どの相手も比率はさすがに小さく、いずれも約10%以下の比率である。高齢者の交際は多様に広がり、その比率も高いというべきである。

高齢者の社会関係は、近所の人や親しい友人の交際が多く、それに別居の子供を含む親族との交際がつづき、親戚や兄弟姉妹との交際はそれより少なくなる。もっとも、この交際の頻度は、そのまま質的な親密さや大切さをそのまま意味するとは限らないであろうが、それにしても、日常生活における近所の人や親しい友人の比重は大きい。

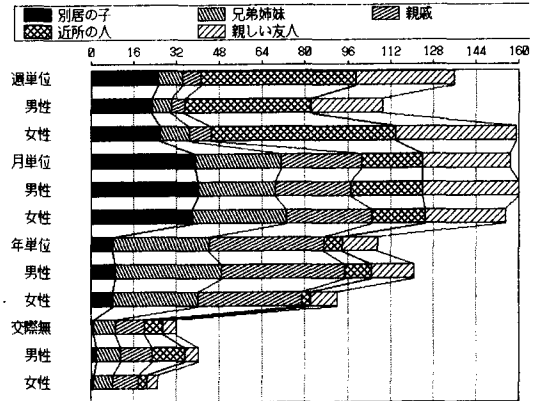


図2 社会関係(交際頻度)・性別(%)

交際の頻度は、男女別でみると、週単位では、近所の人、親しい友人、別居の子、兄弟姉妹、親戚のいずれにおいても、女性が男性よりも比率が高くなっている。特に、近所の人、親しい友人の交際の頻度はそうである。女性は男性よりも週単位の親密な社会関係を持っているわけである。月単位では、様子が変わって、女性が男性をわずかに上回る交際頻度は兄弟姉妹と親戚に見られるが、他の別居の子、親しい友人、近所の人では男性が女性をこえる交際頻度となる。年単位の交際頻度になると、親戚、兄弟姉妹、近所の人、親しい友人、別居の子のいずれにおいても、男性の比率が女性のそれを上回っている。男性は、月単位や年単位の交際頻度に示されるような、女性よりはやや親密さのうすい社会関係を持っているということになる(図2)。

交際の頻度を年代別からみると、週単位では、年代を重ねるとともに、兄弟姉妹や親戚の比率は低下する一方では、近所の人、親しい友人、別居の子の比率はほぼ上昇または横這いの傾向を示す。月単位では、親しい友人、近所の人比率は、年代があがるにつれて、ゆるやかに低下するが、別居の子、兄弟姉妹、親戚の比率は増減する。高齢になるほど、近所の人や親しい友人の社会関係や、別居の子との社会関係が、日常的な生活では比重を大きくしているわけである(図3)。

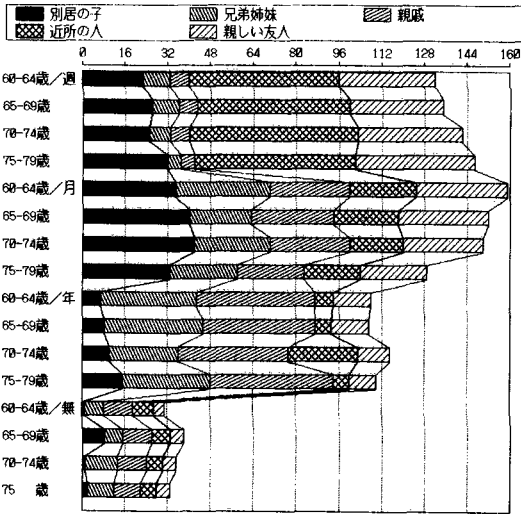


図3 社会関係（交際頻度）・年齢別

7 高齢者の生活と意識

ここで、孫や家族に関する高齢者の意見と、生活満足感・「老い」に対する態度、モラルについてまとめて触れることにしよう。

孫に関する意見 孫は、高齢者の場合、特別の意味をもつと想定されてきたように思われる。大都市における高齢者と孫との関係がしきりに問題にされる現状からみても、孫に関する高齢者の態度を知ることには大きな意味があろう。

用意された孫に関する意見と回答の結果は次のようになった（賛成＝「そう思う」＋「大体そう思う」、反対＝「あまり思わない」＋「思わない」）。

- ①「孫のようお手本となるよう、いつも心がけていたいと思っている」 賛成52%、反対15%
- ②「孫がいるおかげで、若々しい気持ちになれ、うれしく思っている」 賛成50%、反対16%
- ③「孫がいるおかげで、社会に対する責任を果たしたように思える」 賛成40%、反対25%
- ④「孫がいるおかげで、生きていてよかったように思える」 賛成54%、反対13%

いずれの意見も、孫の存在は高齢者の生活にとって大きな価値をもつものと認識されている意見となっているが、どの意見についても、賛成が反対を大きく上回っている。すべての項目におい

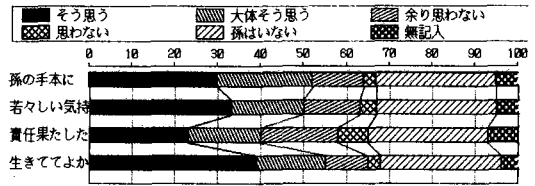


図4 孫に関する意見

表28 孫に関する意見
(性別・年齢別、そう思う＋大体そう思う)

	孫の手に となる	若々しい 気持ち	責任を果 した	生きてて よかった
全体	51.7	49.8	40.1	54.2
男性	48.3**	46.5**	38.6**	50.2**
女性	54.9	52.9	41.4	57.7
60～64	41.4**	39.5**	32.3**	43.4**
65～69	54.6	52.9	40.9	57.2
70～74	61.6	59.7	49.4	64.5
75	66.3	64.0	49.5	68.5

** χ^2 検定 1%有意

て、女性の方が男性よりも、賛成が多い。それだけ、女性の方が孫に関する関心は強いといえよう（図4）。しかも、注目すべきは、すべての項目において、高齢になるにつれ、賛成する比率が確実に増大していることである。あえていうが75歳では、賛成は、「孫のよいお手本」66%、「若々しい気持ち」64%、「社会に対する責任」50%、「生きててよかった」69%となっている。高齢者にとっての孫の存在の大きさは、ここに端的に示されているようである（表28）。

家族に関する意見（家族観） 孫に関する意見とともに家族に関する意見についても回答を求めた。

- ①「長男またはあととりは、親が暮らしに困っている場合、一番責任をもって世話すべきである。」 賛成60%、反対33%
- ②「長男またはあととりは、他の兄弟姉妹よりも、親の財産を多く相続するのは当然である。」 賛成55%、反対38%
- ③「子供が一人もいない場合には、養子を迎える必要がある。」 賛成18%、反対67%

④「子供のうち誰か一人は、結婚しても両親と同居すべきである。」 賛成30%、反対62%

⑤「親が高齢になった際、子供どんなことをしても年をとった親を扶養すべきである。」 賛成55%、反対39%

⑥「炊事や洗濯などの家事に、男性も参加すべきである。」 賛成54%、反対41%

家族に関する伝統的な価値を含む意見が多いが、回答は多様化した。家族観は、高齢者において、一枚岩のように一つには決して固まっていない(図5)。

長男の親の世話・相続については、賛成が半数をこえたが、反対も多い。賛成は女性より男性に多い。

子供の親の扶養については、やはり賛成が半数をこえたが、反対も多い。子供の親との同居については、反対が62で賛成を大きく上回った。養子を迎えることについても、反対67は賛成を大きく上回った。親の扶養や親との同居は、賛成は男性より女性に多いのだが、養子は、賛成は男性に多

い。

家事・洗濯への男性の参加は、賛成が多かったが、意見は2つに分かれているといった方がいいであろう。面白いことに、これは女性よりも男性に賛成が多かった。

これらの家族に関する意見は、年代別では、大筋としては、高齢になるにしたがい、賛成の比率が増大する傾向が見える(表29)。

モラル 高齢者のモラルを見るために用意された項目は、7項目である。

- ①「家族や親戚との行き来に満足」 はい79%、いいえ11%
- ②「今の生活に満足」 はい77%、いいえ17%
- ③「友人との行き来に満足」 はい73%、いいえ11%
- ④「自分の人生は年をとるにしたがってだんだん悪くなっていく」 はい18%、いいえ62%
- ⑤「現在、去年と同じくらい元気がある」 はい57%、いいえ61%
- ⑥「年をとって前よりも役に立たなくなった」 はい37%、いいえ52%
- ⑦「年をとるということは、若いときに考えていたより、よい」 よい23%、わるい54%

①②③の3項目は生活満足感(幸福感)に関するもの、④⑤⑥⑦の4項目は「老い」に関するものである。生活満足感は、この3つの項目によってみるかぎり、73%~79%の高齢者が肯定し、生活満足感をもつ高齢者は多い。「老い」に対しては、

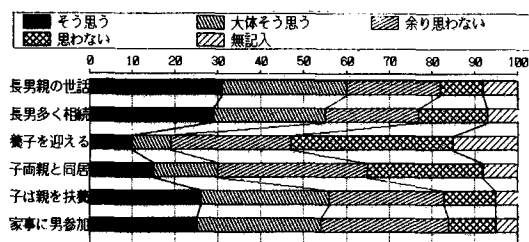


図5 家族に関する意見

表29 家族に関する意見・性別・年齢別(そう思う+大体そう思う)

	長男が親の世話	長男が多く相続	養子を迎える必要	子は両親と同居	子は親を扶養	家事に男性も参加
全体	59.8	54.5	18.4	30.2	55.2	53.9
男性	62.6**	54.9 *	21.8**	28.9**	52.9**	59.2**
女性	57.2	54.0	15.3	31.3	57.3	49.1
60~64	56.0**	51.6**	14.2**	25.5**	51.3**	54.6
65~69	61.0	53.9	17.5	28.7	53.7	52.4
70~74	63.0	58.0	24.8	38.0	62.3	54.4
75	64.1	60.7	27.0	40.5	60.7	59.5

**χ²検定 1%有意 *χ²検定 5%有意

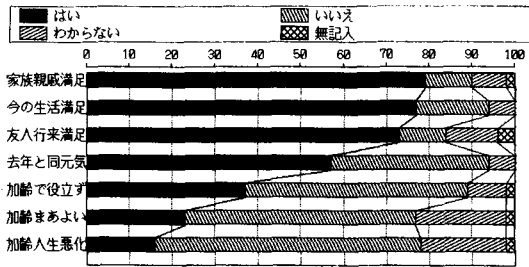


図6 モラル

⑦の項目を除く3つの項目で見ると、52%以上の高齢者は、「若い」をマイナスの方向で捉えていて、その意味において、「若い」に満足感をもつ高齢者が多い。いずれにせよ、満足感をもっている高齢者は多いといえるようである。しかし、⑦の項目では「よい」と思う高齢者は23%、「悪い・同じ」と思う高齢者は54%、「わからない」21%となっていて、さすがに、若い時よりは「若い」を強く感じる高齢者は半数をこえている(図6)。

満足感をもつ高齢者は、大きな差ではないが、大体、男性よりも女性に多いようである。年齢増(加齢)があたえる影響は、生活満足感より「若い」に対する態度の方に大きく、特に⑤「元気がある」と⑥「役に立たなくなった」の項目において年代の差が目立っている(表30)。

8 余暇活動の属性分析

余暇活動、集団参加、社会関係に焦点をあて、やや詳細に分析を加えてみよう。

定期的・日常的な余暇活動 すでにみた通り、定期的・日常的な余暇活動の現状は、一人で「趣

味」を楽しむ高齢者が多く、他の「スポーツ」、「居酒屋」、「図書館」、「文化講演」、「趣味教室」などは、それと比較して少なかった。つまり、「趣味」活動を別として、余暇活動を「しなかった」高齢者が多数派をしめているわけである。このような余暇活動の現状は、どんな要因に関連しつつ展開しているのだろうか。その「しなかった」層から接近してみよう(図7)。

比較的是っきりしている関連要因は、健康状態、学歴、「暮らし向き」(階層意識)、就業状態などである。健康状態が、「非常に健康」から、「無理がきかない」、「病気がち」、「寝ていることが多い」状態になるにつれて、余暇活動を「しなかった」層が多くなるのは当然であろう。健康状態の差は余暇活動に非常に大きく影響しており、特に「趣味」では、「しなかった」層は、「健康」は24%にとどまり、「寝ていることが多い」は65%に上る。

年齢はこの健康と強く相関していて、確かに「しなかった」層の比率が高齢になるほど上がる傾向もないわけではない。しかし、概して大きな差はなく、むしろ、「しなかった」比率が下降する「文化講演」、「趣味教室」などの余暇活動もある。

学歴では、学歴年数が長くなるほど、「しなかった」層は少なくなる。とくに「趣味」では低学歴46%と高学歴21%の差はもっとも大きい。ただ、「文化講演」、「趣味教室」などの余暇活動では、大きな差はなくなっている。

「暮らし向き」からの階層意識の差も、余暇活動を「しなかった」層に、明確な一定の傾向として現れている。すなわち、「上」から「下」に向かうにつれて、余暇活動を「しなかった」層が増加

表30 モラル (性別・年齢別、「はい」)

	性別		年齢別			
	男	女	60~64歳	65~69	70~74	75
家族・親戚の行き来に満足	78.1	79.1*	77.9	79.4	78.9	75.3*
今の生活に満足	74.7	78.2**	74.9	77.2	78.1	77.5**
友人との行き来に満足	67.5	77.2**	72.9	72.3	73.0	68.5
人生は年をとるにしたがい悪化	17.8	14.0**	14.1	15.3	19.0	13.5**
去年と同じくらい元気がある	60.7	52.7**	60.5	56.7	51.4	43.8**
年をとって役に立たなくなった	37.3	37.4	27.5	37.1	49.7	65.2**
年をとることは考えていたよりよい	24.2	22.4*	22.7	23.8	23.6	20.2*

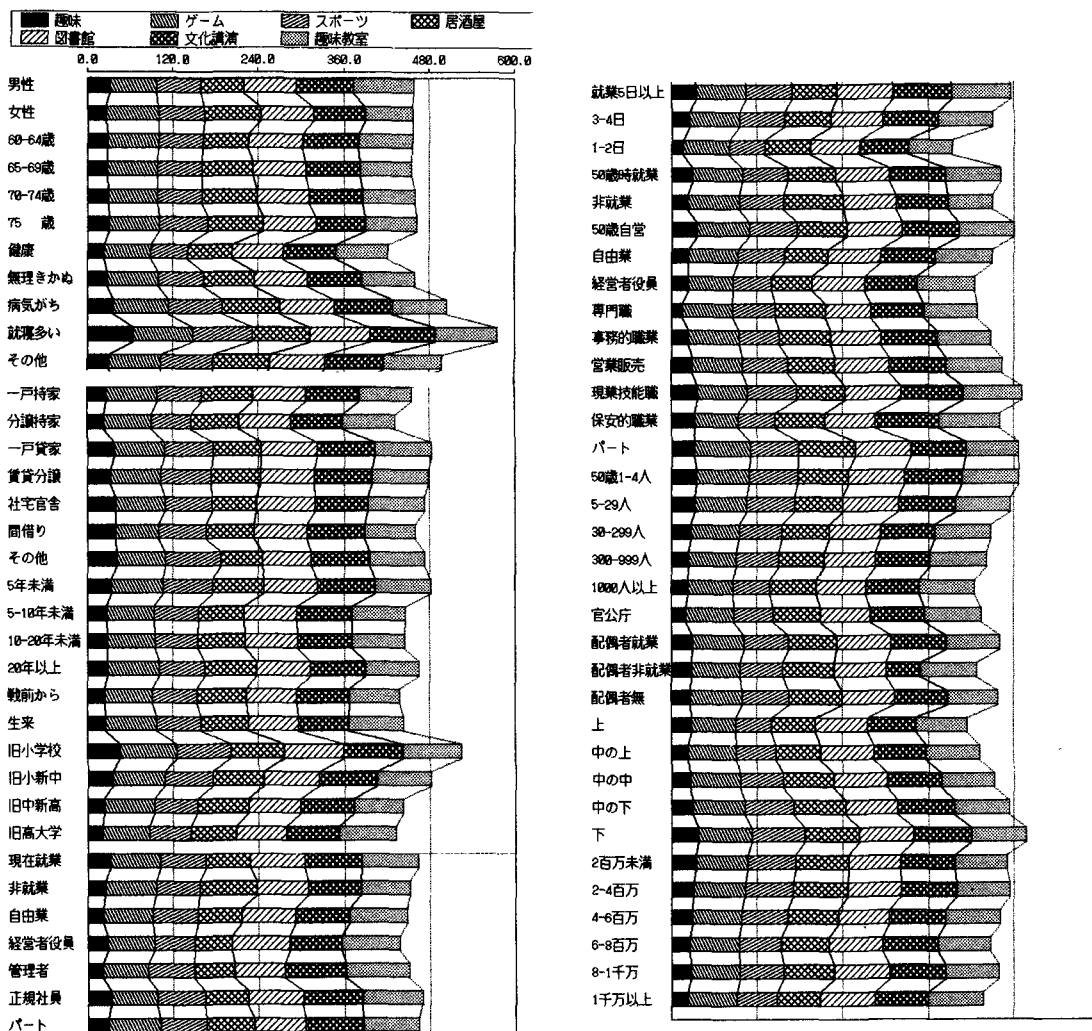


図7 基本的属性と余暇活動(定期的)「しなかった」層

している。世帯収入による所得階層は「暮らし向き」の階層意識と相関していると思われ、確かに「趣味」や「スポーツ」に世帯収入が低くなるほど「しなかった」層は増える傾向にあり、また最高の世帯収入層に「しなかった」層が多くなる傾向もみられるものの、しかし、世帯収入は「暮らし向き」ほどの明確な一定の傾向をみせてはいない。

就業状態と余暇活動の関連をみると、現在の就業者は、非就業者よりも、「ゲーム」と「居酒屋」を別として、余暇活動を「しなかった」層が多い。このような関連は、50歳の時点においても、就業

者と非就業者の間に、すでに見られるものである。もちろん、就業日数がこれに深く関連していて、就業日数が多いほど、余暇活動を「しなかった」層は多くなる傾向がある。余暇活動を「しなかった」層が現に就業している高齢者に多いのは常識的にも理解されるが、「ゲーム」と「居酒屋」はそのような傾向からはずれるというのは興味深い。

現在の職業からいうと、余暇活動を「しなかった」職業が多いのは、全体としては、自営業主・家族従業員、正規社員・職員、嘱託・パートであり、それより少ないのは自由業、経営者・役員、管理職の職業である。50歳の時点の職業をこれと

合わせて比較してみると、余暇活動を「しなかった」職業が多いのは、全体としては、嘱託・パート、自営業主・家族従業員、正規の被雇用者であり、それより少ないのは自由業、経営者・役員、管理職の職業である。これで見ると、現在の余暇活動の状況は、大筋は50歳の就業の時点から変わっていないことになる。ただし、いずれの時点においても、各層の差は大きいものではない。正規の被雇用者としてくつった、専門職、事務的職業、営業販売、現業・技能職、保安的職業を別々にしてみると、全体のなかで、現業・技能職に余

暇活動を「しなかった」高齢者がもっとも多くなっている。面白いことには、余暇活動を「しなかった」層は、50歳のときに勤務していた勤務先の従業員規模にも強く関連しているようにみえる。大企業（従業員規模が大きくなる）ほど、余暇活動を「しなかった」層は少なくなる傾向が見られるのである。

非定期的・非日常的な余暇活動 非定期的、非日常的な余暇活動は、ベストスリーの「神社・仏閣」、「繁華街」、「国内旅行」は8割以上、「観劇・映画」、「博物館」、「スポーツ」は4～6割、「海外

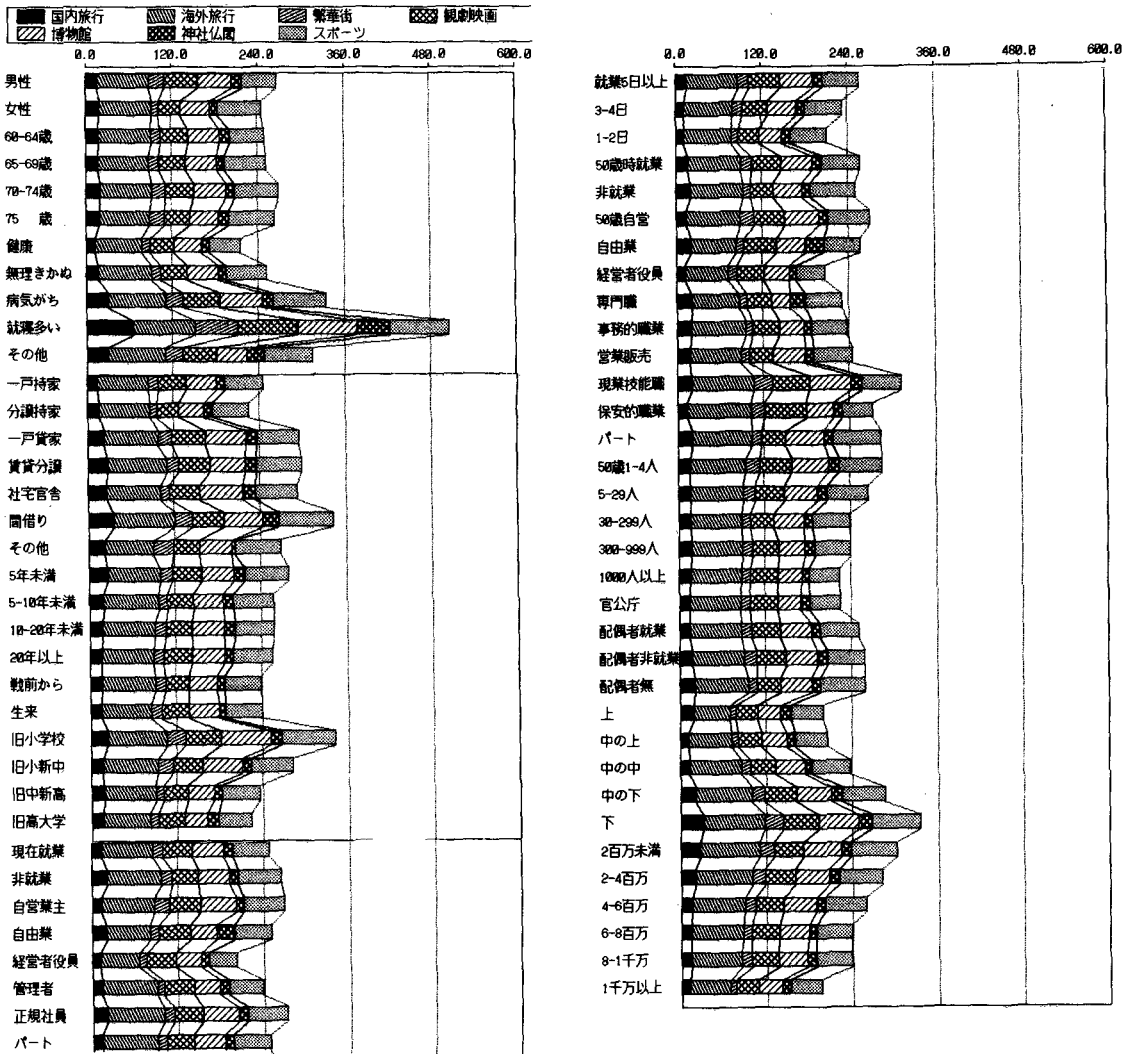


図8 基本的属性と余暇活動（不定期的）「ない」層

旅行」は2割強がそれぞれ行っていたことはすでに見た。非定期的・非日常的な余暇活動では、この1年に1回以上は「した」高齢者が多いのだが、定期的・日常的な余暇活動に合わせて、これも余暇活動を「しなかった」層から接近してみよう(図8)。

関連要因として、比較的是っきりしているのは、定期的・日常的な余暇活動と同じく、健康状態、学歴、「暮らし向き」(階層意識)、就業状態などである。非定期的・非日常的な余暇活動の経験も、健康状態が、「非常に健康」から、「無理がきかない」、「病気がち」、「寝ていることが多い」状態になるにつれて「ない」層が多くなる。非定期的・非日常的な余暇活動は、比較的大きな活動量が必要とされるだけに、健康状態の差は非常に大きくしている。

年齢は健康と強く相関しているが、しかし、この非定期的な余暇活動でも、「スポーツ」のように加齢とともに「ない」人々が増える活動もあるが、全体としては概ね年代に大きな差はないというのが特色であるというべきであろう。

この非定期的な余暇活動にも学歴の要因はかなりきいている。学歴年数が長くなるほど、「ない」層ははっきり少なくなるのである。特に「博物館」、「スポーツ」、「繁華街」、「海外旅行」での相関関係は強い。

「暮らし向き」の階層意識の差も、やはり余暇活動の「ない」層に明確な一定の傾向として現れている。「上」から「下」に向かうにつれて、余暇活動の「ない」層が増加している。世帯収入の所得階層で見ても、非定期的な余暇活動は、定期的なそれよりは、明確な一定の傾向、すなわち、世帯収入が低くなるほど「ない」層は増えるという傾向を示している。いずれにしても、非定期的な余暇活動は、定期的な活動とは異なり、少なくとも経済的な余裕を必要としているということだろう。

これらの階層意識や世帯収入にもかかわるだろうとおもわれるが、住居形態では、持家よりも借家(一戸貸家、賃貸分譲、社宅・官舎、間借り)に、余暇活動の「ない」層が比較的多くなってい

る。

就業状態との関連ではどうか。現時点の就業状況において、非定期的な余暇活動の「ない」高齢者は、非就業者にやや多い程度か、あるいは就業者も非就業者もあまり差はない。50歳の時点においては、就業者には「繁華街」、「観劇・映画」の余暇活動の「ない」高齢者が多く、非就業者には「国内旅行」や「スポーツ」の「ない」層が多い。ベストスリーに入っている「繁華街」、「国内旅行」がここに顔を出していることは見落とせない。「海外旅行」、「博物館」、「神社・仏閣」はほとんど同じである。いずれも、定期的な余暇活動とは異なって、就業者と非就業者の差は一律に捉えられないところがある。しかし、やはり、就業日数が多いほど、余暇活動の「ない」層は多くなる傾向が見えるところは、定期的活動と同じである。非定期的な余暇活動には、経済的な余裕に加えて、時間的な余裕も必要であることが、いっそうはっきり出ていることになる。

現在の職業からいうと、余暇活動の「ない」層が多いのは、全体としては、正規社員・職員、自営業主・家族従業員、嘱託・パート、自由業の就業者であり、それより少ないのは、経営者・役員、管理職業の就業者である。50歳の時点での職業をこれと合わせて比較してみると、多い方から、嘱託・パート、自由業主・家族従業員、正規の被雇用者、自由業、経営者・役員・管理職業の順に並び、やはり、現在の状況は、大筋は50歳の就業の時点からあまり変わっていない。ただし、いずれの時点においても、各層の差は大きいものではない。専門職、事務的職業、営業販売、現業・技能職、保安的職業の正規の被雇用者を別々にしてみても、全体のなかで、現業・技能職に余暇活動の「ない」高齢者がもっとも多くなっている点も、定期的な余暇活動の場合と同じである。

余暇活動の「ない」層は、50歳のときに勤務していた勤務先の従業員規模で見ると、30人以下の中小企業に「ない」層が多くなる傾向がある*。

* 集団参加、社会関係の属性分析については、改めて別稿を用意する予定である。

9 社会活動の相互関係

余暇活動の相互関係 定期的・日常的な余暇活動の相互関係を、回答者の二つの余暇活動で、両者とも「した」という場合と、両者とも「しなかった」という場合の比率で考えてみよう。

二つの余暇活動が同時に選択される比率が高い余暇活動は、当然ながら、個別に選択される比率が高い「趣味」との組み合わせで、「趣味」・「スポーツ」(定期)24%、「趣味」・「ゲーム」15%、「趣味」・「居酒屋」15%、「趣味」・「図書館」15%、「趣味」・「趣味教室」15%などである。逆に、同時には選択されない比率が高い余暇活動は、「ゲーム」、「スポーツ」(定期)、「居酒屋」、「趣味教室」、「図書館」、「文化講演」の相互の組み合わせである(表31)。

不定期的な余暇活動の相互関係を同様にして見れば、選択される比率の高い余暇活動は「繁華街」、「神社・仏閣」、「国内旅行」、「観劇・映画」の組

み合わせとなる。すなわち、「繁華街」・「神社・仏閣」74%、「国内旅行」・「神社・仏閣」72.1%、「繁華街」・「国内旅行」70%、「繁華街」・「観劇・映画」54%、「神社・仏閣」・「観劇・映画」53%、「国内旅行」・「観劇・映画」52%がその比率の高い組み合わせである。逆に、選択されない比率の高い余暇活動は「海外旅行」、「スポーツ」(不定期)、「博物館」の組み合わせである(表32)。

さらに、定期的な余暇活動と不定期的な余暇活

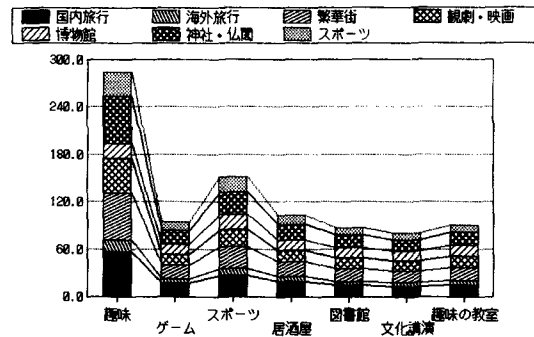


図9 余暇活動 (定期×不定期)

表31 余暇活動 (定期にこの1年間、しない/した) の複数選択

	趣 味	ゲーム	スポーツ	居酒屋*	図書館	文化講演	趣味教室
趣 味	-	15.0	24.0	14.8	15.2	12.8	14.7
ゲーム	24.0	-	8.3	6.6	4.8	3.7	4.2
スポーツ	23.2	51.3	-	8.6	7.2	7.5	8.4
居酒屋*	22.2	56.3	50.3	-	4.0	4.1	3.5
図書館	26.3	58.8	52.7	57.5	-	5.7	5.
文化講演	26.5	60.3	55.4	60.0	365.6	-	6.4
趣味教室	26.2	59.0	54.4	57.5	63.4	67.4	-

総数に対する比率

表32 余暇活動 (不定期にこの1年間に、ない/ある) の複数選択

	国内旅行	海外旅行	繁華街	観劇映画	博物館	神社仏閣	スポーツ
国内旅行	-	20.4	70.1	51.5	46.8	72.1	36.7
海外旅行	18.1	-	19.7	15.9	15.6	20.0	12.6
繁華街	7.4	15.1	-	53.6	48.2	73.9	36.1
観劇映画	13.5	36.0	13.2	-	39.5	52.9	27.7
博物館	14.7	41.6	13.7	29.9	-	48.2	28.1
神社仏閣	6.8	12.8	6.3	10.0	11.2	-	36.8
スポーツ	16.6	50.5	13.6	29.9	36.2	11.7	-

総数に対する比率

動の相互関係では、選択される比率の高いそれぞれの余暇活動、つまり、「趣味」や「スポーツ」（定期）と「神社・仏閣」、「繁華街」、「国内旅行」の組み合わせが多くなる。「趣味」・「神社・仏閣」59%、「趣味」・「繁華街」59%、「趣味」・「国内旅行」56%などがそれである。逆に、選択される比率の低い余暇活動は「文化講座」、「趣味教室」、「図書館」と「海外旅行」、「スポーツ」（不定期）の組み合わせである（図9）。

地域集団の相互関係 町内会・自治会と老人会・老人クラブの関係は、老人会・老人クラブの役員経験者の8割近くが町内会・自治会の役員経験者であり、老人会・老人クラブが町内会・自治会との関係は深い。しかし、町内会・自治会に加入していても、老人会・老人クラブに加入してい

ない高齢者は非常に多い（表33）。

ボランティア・アソシエーション（V.A.）の相互関係 V.A.の相互の関係では、まず、地域団体・職域団体・自主団体の三領域の境界をこえて、同じ活動内容の団体が相互に関係する傾向が見いだされる。娯楽団体の相互の関係がもっとも強く、スポーツ団体やボランティア団体も、それぞれ、相互の関係が強い。教養団体は、これらの団体に比較すると相互関係は弱いようである。三領域の境界をこえた異なる内容の団体の相互関係は、娯楽団体とスポーツ団体の間にも見いだされ、これは定期的な余暇活動において、趣味とスポーツの組み合わせの選択が多いことを想起させる。地域団体としてのボランティア団体と自主団体としての娯楽団体との関係も見落とせない。

表33 町内会・自治会と老人会・老人クラブの加入状況

	加入役員 経験有	加入役員 経験有無	加入して いない	無記入	
加入役員経験有	17.4 (77.1)	14.4 (28.4)	62.9 (21.6)	5.3 (26.4)	100.0
加入役員経験無	1.7 (11.1)	17.9 (53.5)	77.3 (40.0)	3.1 (23.4)	100.0
加入していない	0.9 (4.4)	4.3 (9.9)	94.1 (37.5)	0.7 (4.2)	100.0
無記入	9.5 (7.4) (100.0)	23.7 (8.3) (100.0)	14.7 (0.9) (100.0)	52.1 (46.0) (100.0)	100.0

表34 ボランティア・アソシエーションの相互関係（相関係数）

	地域団体		職域団体			自主団体						
	娯楽	スポ	教養	ボラ	娯楽	スポ	教養	ボラ	娯楽	スポ	教養	ボラ
地位・娯楽	-	.1667**	.0963**	.1018**	.3640**	.442 *	-.0325	.0705**	.4250**	.0678**	.0158	.0599
地位・スポ		-	.1104**	.1106**	.0572**	.4159**	.0419 *	.0447 *	.1071**	.3956**	.624**	.0639**
地位・教養			-	.1351**	.0288	.0346	.3421**	.0650**	.0755**	.0302	.4212**	.0991**
地位・ボラ				-	.0238	.0401 *	.0587**	.5678**	.0594**	.0516**	.0984**	.5576**
職域・娯楽					-	.1879**	.1214**	.0862**	.3473**	.0558**	.0123	.0239
職域・スポ						-	.1270**	.0841**	.0836**	.3877**	.0424 *	.0630**
職域・教養							-	.1261**	.0693**	.0326	.3698**	.0976**
職域・ボラ								-	.0433*	.0540**	.1032**	.5319**
自主・娯楽									-	.1564**	.1173**	.0614**
自主・スポ										-	.0989**	.0677**
自主・教養											-	.1508**
自主・ボラ												-

両側検定：* - .01 ** .001

しかし、三領域のそれぞれの境界内において、異なる種類の団体の相互関係も見られる。地域団体・職域団体・自主団体の三領域は一定の独自性あるいは影響力をもっているということである。地域団体における娯楽団体—スポーツ団体、娯楽団体—ボランティア団体、娯楽団体—教養団体、職域団体における娯楽団体—スポーツ団体、自主団体における娯楽団体—スポーツ団体、娯楽団体—教養団体がそれである（表34）。

地域集団とボランティア・アソシエーション (V.A.) これらのV.A.と町内会・自治会との関係はどうか。地域団体では、町内会・自治会の加入・役員経験者の21~33%が、加入・役員無経験者の5~20%が、そして非加入者の3~11%が、地域団体に加入している。比率は異なるが、職域団体、自主団体も同じような傾向にある（図10）。これで見ると、町内会・自治会の役員経験者はV.A.（特に地域団体、娯楽団体）に加入している場合が多く、これらの高齢者は町内会・自治会やV.A.とのかかわりが非常に深いのである。しかし、町内会・自治会の役員無経験者になると、その傾向はかなり薄らぎ、町内会・自治会の非加入者に近くなっていて、町内会・自治会やV.A.とのかかわりは浅い。留意していいと思われることは、町内会・自治会非加入者は、「地域の人」でつくるどの団体よりも、「仕事仲間」や「地域の人や仕事仲間以外の人」でつくる団体に加入する比率が上廻っていることである。比率そのものは小さいが、地域にかかわりなく活動する高齢者が存在しているということであろう。

町内会・自治会と老人会・老人クラブとの関係は、町内会・自治会とV.A.との関係よりは深いよ

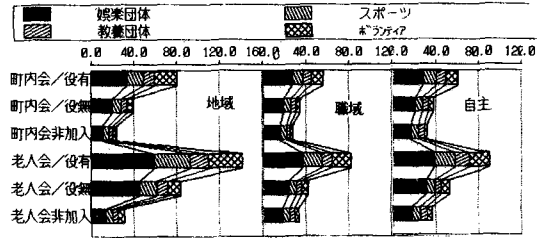


図10 町内会・自治会と老人会・老人クラブの加入とV.A.

うである。地域団体でいうと、老人会・老人クラブの加入・役員経験者の17~59%が、加入・役員無経験者の12~46%が、そして非加入者の5~14%が、地域団体に加入している。比率は異なるが、職員団体、自主団体も、同じような傾向にある（図10）。老人会・老人クラブの加入・役員経験者は、町内会・自治会の場合以上に、V.A.（特に地域団体、娯楽団体）に加入している場合が多く、これらの高齢者は老人会・老人クラブとともにV.A.とのかかわりが深い。

社会関係（交際）の相互関係 近居と交際 社会関係（交際）は、別居の子、兄弟姉妹、親戚、近所の人、親しい友人の人々が近居していれば、当然ながら交際に影響すると思われることはすでに指摘した。実際に、もっともその影響が大きいのは親しい友人であり、近居していれば社会関係に強く影響するという相関が認められる。兄弟姉妹や親戚との相関もほぼ同様で、近居していれば社会関係に影響する。親しい友人と近所の人との相関も同じ傾向をみせるが、これは親しい友人と近所の人が重複している場合があるからであろう（表35）。

社会関係（交際）における人々の相互関係 こ

表35 近居の人と交際（相関係数）

	別居の子	兄弟姉妹	親	戚	近所の人	親しい友
兄弟姉妹近居	.0446 *	.5610**	.2167**	.1010**	.0844 *	
義兄弟近居	-.0595**	.1977**	.2229**	.0750**	.0591**	
親戚近居	.0990**	.2601**	.4115**	.1539**	.1328**	
親友近居	.0666**	.1654**	.2332**	.3158**	.6653**	

両側検定：* - .01 ** .001

表36 交際の相互関係（相関係数）

	別居の子	兄弟姉妹	親 戚	近所の人	親しい友
別居の子	-	.0602**	.0989**	.1470**	.0855**
兄弟姉妹		-	.4708**	.2489**	.2298**
親 戚			-	.3224**	.2877**
近所の人				-	.3830**
親しい友					-

両側検定：* - .01 ** .001

表37 近所の人と別居の子／兄弟姉妹／親戚／親しい友人

	*親戚と 近所の人	*友人と 近所の人	*別居の 子と近所	*兄弟と 近所の人
両者とも交際した	82.3	88.9	91.6	91.6
両者とも交際しなかった	2.1	1.0	0.3	0.3
*だけと交際した	5.5	5.9	6.7	6.7
近所だけと交際した	10.1	4.2	1.4	1.4
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

これらの人々の相互の社会関係では、兄弟姉妹と親戚、近所の人と親しい友人、親戚と近所の人との相関が強く出ており、これらの人々との社会関係における相関を示している(表36)。つまり、兄弟姉妹と交際する人は同じように親戚とも交際する、近所の人と交際する人は同じように親しい友人とも交際する、親戚と交際する人は同じように近所の人とも交際する、ということになる。

近所の人との関係から見ると、別居の子、兄弟姉妹、親戚、友人のいずれとともに近所の人とも交際する高齢者は、8割以上になっており、高齢者にとって、親族、友人、近隣のいずれも、同じような比重をもっていることが知られる(表37)。

社会関係(交際)の頻度と相互関係 しかし、その交際の頻度になると、状況が異なってくる。近所の人と週単位の交際をし、同時に週単位の交際をしているのは親しい友人(30%)だけである。近所の人と週単位の交際をしながらも、別居の子とは月単位の交際(22%)が多く、兄弟姉妹も月単位(21%)や年単位(20%)の交際が多い。親戚も同様に年単位(23%)・月単位(20%)の交際である(図11)。高齢者の交際では、近所の人とならんで親しい友人が重要な存在になっているわけ

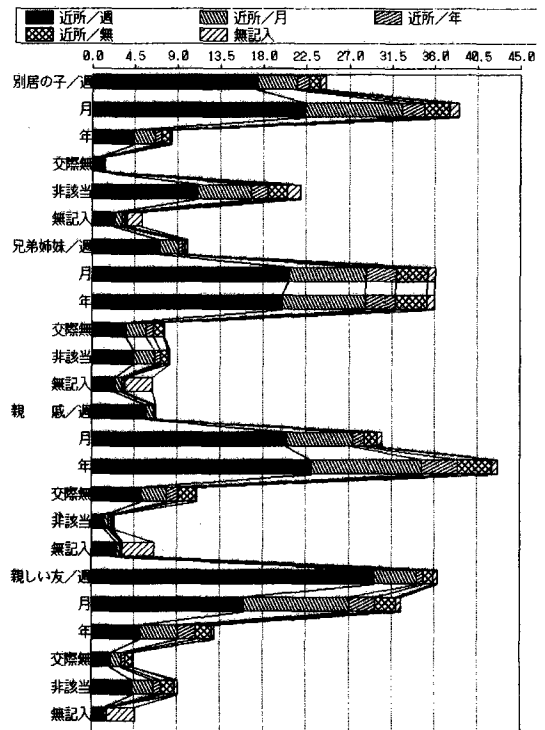


図11 近所の人からみた社会関係(交際)

である。

社会活動の相互関係 以上、余暇活動、集団参加、社会関係(交際)の三者について見たが、最

表38 余暇活動(定期)とボランティア・アソシエーション(相関係数)

	娯楽団体	スポーツ	教養団体	ボランティア*
趣味/地域	-.0854**	-.0581**	-.0833**	-.0051
地 ゲーム	-.0752**	-.0390 *	-.0093	-.0109
域 スポーツ	-.0769**	-.2257**	-.0505**	-.0273
団 居酒屋*	-.0557**	-.0329	.0155	-.0093
体 図書館	-.0512**	-.0466**	-.0755**	-.0015
文化講演	-.0810**	-.0744	-.1636**	-.1049**
趣味教室	-.1357**	-.1078**	-.1369	-.0439*
趣味/職場	-.0546**	-.0437 *	-.0643**	-.0103
職 ゲーム	-.0703**	-.0381 *	-.0311	-.0165
域 スポーツ	-.0609**	-.1714**	-.0380 *	-.0117
団 居酒屋*	-.1076**	-.0445 *	-.0239	-.0217
体 図書館	-.0224	-.0115	-.0286	-.0023
文化講演	-.0392 *	-.0053	-.0773**	-.0813
趣味教室	-.0310	-.0052	-.0655**	-.0282
趣味/自主	-.0823**	-.0452 *	-.0756**	-.0293
自 ゲーム	-.0808**	-.0450 *	-.0082	-.0033
主 スポーツ	-.0867**	-.1878**	-.0326	-.0211
団 居酒屋*	-.0566**	-.0456 *	-.0068	-.0007
体 図書館	-.0479 *	-.0259	-.0426 *	-.0074
文化講演	-.0717**	-.0310	-.1176**	-.0808**
趣味教室	-.1184**	-.0381 *	-.1125**	-.0449 *

両側検定: * - .01 ** .001

後に、これら三者の相互関係を見よう。

余暇と集団参加 「趣味」と「ゲーム」は、V. A. とは相関が低い(表38)。余暇活動(定期)とV. A. との関係では、「趣味教室」は地域の娯楽、スポーツ、教養の各団体、および自主団体の娯楽、教養、ボランティアとの相関が高く、「文化講演」は地域の教養、ボランティアおよび自主団体の教養との相関が強い。また、「図書館」は地域の教養に、「居酒屋」は職域の娯楽に相関が高い。さらに「スポーツ」は地域・職域・自主のいずれの「スポーツ」とも相関が高い。高齢者は、余暇活動(定期)とこれらの団体にも同時にかかわることがそれなりに多く、それとともに、その関係には選択的な同系統の一定の方向性(パターン)が見い出される。

一方、余暇活動(不定期)とV. A. との関係では、「スポーツ」は地域・職域・自主のいずれのスポー

ツ団体とも相関があり、同じように、「国内旅行」は地域・職域・自主のいずれの娯楽団体とも相関がある。「神社・仏閣」は地域の娯楽団体、「博物館」は地域と自主の教養団体、「観劇・映画」は自主の教養団体と相関が高い。高齢者は、やはり、余暇活動(不定期)とともにこれらの団体活動ともそれなりの関係をもつことが多いようであり、また同時にその関係には選択的な(同系統の)一定の方向性(パターン)が見い出されるようである(表39)。

社会関係(交際)と余暇 社会関係(交際)と余暇活動の相関では、高齢者は、親しい友人、親戚との交際とともに、定期的・不定期的な余暇活動に参加することが多い。特に、親しい友人と余暇活動の相関は高い(表40、41)。

社会関係(交際)とV. A. 社会関係(交際)と集団参加の関係をみると、地域・職域・自主のい

表39 余暇活動（不定期）とボランティア・アソシエーション（相関係数）

	娯楽団体	スポーツ	教養団体	ボランティア
国内旅行	.1994**	.1204**	.0791**	.1120**
地 海外旅行	.0462 *	.0950**	.0827**	.0714**
域 繁華街	.0210	.0354	.0868**	.0270
団 観劇・映画	.1064**	.0847	.1295**	.0841**
体 博物館	.0419 *	.0834**	.1874**	.0771**
神社仏閣	.1368**	.0745**	.0681**	.0992**
スポーツ	.0278	.2077	.0800**	.0762**
国内旅行	.1991**	.1117 *	.0656**	.0859**
職 海外旅行	.1027**	.0851 *	.0769	.0660**
域 繁華街	.0175	.0338	.0641**	.0185
団 観劇・映画	.0736**	.0447 *	.0796**	.0583**
体 博物館	.0676**	.1016**	.1669**	.0477 *
神社仏閣	.0837**	.0482 *	.0537**	.0787**
スポーツ	.1202**	.3100**	.0776**	.0552**
国内旅行	.2055**	.0996**	.0716**	.0927**
自 海外旅行	.1210**	.1078**	.1009**	.0885**
主 繁華街	.0738**	.0334	.1062**	.0401 *
団 観劇・映画	.1466**	.0552**	.1380**	.0859**
体 博物館	.1242**	.0857**	.2289**	.1000**
神社仏閣	.1185**	.0390 *	.0580**	.0787**
スポーツ	.0889**	.3203**	.1066**	.0722**

両側検定：* - .01 ** .001

表40 余暇活動（定期）と交際（相関係数）

	別居の子	兄弟姉妹	親	戚	近所の人	親しい友
趣 味	.0221	.0479 *	.0860**	.0708**	.1147**	
ゲーム	.0656**	.0671**	.1176**	.0548**	.0897**	
スポーツ	.0538**	.0552**	.1073**	.0506**	.1026**	
居酒屋*	.0279	.0568**	.1083**	.0209	.0947**	
図書館	.0480 *	.0730**	.1169**	.0624**	.0551**	
文化講演	.0845**	.0973**	.1413**	.1027**	.1222**	
趣味教室	.0733**	.0894**	.1330**	.1141**	.1307**	

両側検定：* - .01 ** .001

表41 余暇活動（不定期）と交際（相関係数）

	別居の子	兄弟姉妹	親	戚	近所の人	親しい友
国内旅行	-.1062**	.0054	-.0147	-.0555**	-.1698**	
海外旅行	-.0600**	-.0119	.0220	.0529**	-.0522**	
繁華街	-.0087	.0121	.0083	.0050	-.0782**	
観劇・映画	-.0176	-.0146	.0081	-.0216	-.1443**	
博物館	-.0306	.0194	.0421 *	.0632**	-.0845**	
神社仏閣	-.0170	-.0322	-.0416 *	-.1083**	-.1076**	
スポーツ	-.0031	-.0201	.0338	.0749**	-.0732**	

両側検定：* -.01 ** .001

表42 交際とボランティア・アソシエーション（相関係数）

	別居の子	兄弟姉妹	親	戚	近所の人	親しい友
地	-.0670**	.0074	.0157	.0395 *		
域	-.0019 *	.0087	-.0235	-.0239		
団	-.0565**	-.0268	-.0169**	-.0447 *		
体	-.1815**	-.0734**	-.0577**	-.1183**		
	-.1899**	-.1045**	-.0761**	-.1384**		
職	-.0332	.0041	.0066	-.0364		
域	-.0103	.0179	.0035	-.0308		
団	-.0382 *	.0145	-.0023	-.0379		
体	-.0526**	-.0516**	-.0117	-.0890**		
	-.1344**	-.0726**	-.0724**	-.1170**		
自	-.0506**	-.0030	.0146	-.0321		
主	-.0038	.0042	-.0062	-.0257		
団	-.0241	-.0095	.0086	-.0270		
体	-.0854**	-.0325	-.0200	-.0698**		
	-.1591**	-.0913**	-.0888**	-.1055**		

両側検定：* -.01 ** .001

ずれの V. A. とも相関が強いのは、やはり、親しい友人と近所の人である。特に、地域団体と親しい友人、近所の人との相関は強い（表42）。

こうして見ると、余暇活動、集団参加、社会関係（交際）の三者の間には、相互に密接に関連していることが知られる。

高齢者の余暇活動は、定期的であれ不定期的であれ、ボランティア・アソシエーションの活動との選択的な（同系統の）関連をもち（集団参加）、こうした集団参加、特に地域社会における集団参加を持つ高齢者は、親しい友人や近所の人々との

社会関係の機会も多く持っている。

まとめ

われわれの調査結果にもとづいて、東京都心部における高齢者のライフスタイルのポートレイトをまとめてみよう。調査では、就業していない健康な回答者が多いと思われるふしもあるが、ともかく健康な「元気老人」は85%におよぶ。都心部の現住所での20年以上にわたる長期居住者も7割近くで非常に多い。低学歴や中学歴はいずれも4

割弱だが、高学歴23%も少なくない。世帯収入では、低所得層40%弱が多く、「中」流意識は8割強である。

50歳の頃の就業者は80%におよんでいるが、現在の就業者は53%に減少する。特に女性61%の非就業が多く、男性の72%は依然として就業している。就業形態では、ホワイトカラー・ブルーカラー・グレイカラーの被雇用層が激減したが、自営・雇用層はあまり減少していない。

高齢者の家族は、核家族7割、世代家族2割であるが、有配偶者は男9割、女性6割で差が大きい。家計の担い手は男性、家事担当は女性という役割分担が明確である。高齢者の約半分は近居の子をもち、約7割の高齢者は孫をもっているが、既婚の子供や孫との同居は少ない。

日常的な余暇活動では、高齢者の約7割は「趣味」を楽しむが、「スポーツ」、「居酒屋」、「ゲーム」は3割まで、「図書館」、「趣味教室」、「文化講演」は2割までである。これに対して、非日常的な余暇活動では、「神社・仏閣」、「繁華街」、「国内旅行」は8割以上に達し、「観劇・映画」、「博物館」は5割をこえ、「スポーツ」、「海外旅行」は4割～2割をしめている。これらの余暇活動には、性別、年

齢だけではなく、特に健康状態、学歴、階層意識、就業状態などが強く影響する関連要因（属性）としてあげられる。

町内会・自治会の参加は、7割弱であり、役員経験者も多いが、老人会・老人クラブは約2割で、役員経験も少ない。また、地域、職域、自主の領域における、娯楽団体には約2割の、スポーツ・教養・ボランティア団体には1割足らずの高齢者が参加している。

近居の人は、親しい友人6割弱がどのカテゴリーの親族より多く第一位に登場するが、それらの親族も少なくない。そのせいか、週単位の頻度の交際では近所の人や親しい友人の比率がどのカテゴリーの親族よりも高い。月・年単位では親族の比率が高い。

高齢者は余暇活動とV.A.とに同時に関係をもつことがそれなりに多く、その関係には選択的な関連をもつ高齢者は親しい友人や親戚の交際とともに、余暇活動にも参加することが多い。

親しい友人や近所の人とV.A.との相関も強い。V.A.特に地域のV.A.に選択的な集団参加を行なう高齢者は親しい友人や近所の人との社会関係の機会も多くもっている。

Key Words (キー・ワード)

aged society(高齢社会), life style(ライフスタイル), social activities(社会活動), leisure time activities (余暇活動), social participation (社会参加), social relation (社会関係), voluntary association (ボランティア・アソシエーション)

Life Styles of the Elderly in Metropolitan Tokyo
—Report on Social Research in the Twenty-Three Wards of Tokyo—

Yuetsu Takahashi*

*Center for Urban Studies, Tokyo Metropolitan University

Comprehensive Urban Studies, No. 46, 1992, pp. 5–33.

This paper summarizes an investigation into new life styles of the elderly in metropolitan areas. It is very important for the elderly to adopt new life styles in today's aging society ; thus, we must precisely understand the nature of these new life styles, so the elderly can create new life styles by themselves.

Our research shows that the elderly of central Tokyo are to a large extent engaged in various leisure and social activities such as hobbies on a daily basis, visits to temples and shrines, shopping, and domestic travel. They also participate in a variety of other activities, although their rate of participation is not necessarily high.

We also found the elderly taking part in voluntary associations. Some have strong ties within the local society while others are deeply involved in vocational society. Independent activities are also observed. It was also found that the elderly have a wide variety of social relations, such as their close friends and neighbors. They regard these relations as very important in their lives. Their social activities tend to be subject to their health, and influenced by education, employment history or current employment status, class consciousness, and occasionally age and gender.